お母さんの味

「花茶のチャレンジ」

新規就農について想う

「花茶」　小　栗　美　恵

ある日、数回しか会ったことがない女性が尋ねてきて、「小栗さんのような生き方をしたいから、目標だから…」と、私に小さくつぶやきました。

彼女と知り合ったのは、ある直売店で見つけたお花がキッカケ。それほど親しく会話を交わした訳ではなかったけど、何度かお花を求めているうちに、私が花茶の経営者と判り声をかけられたのでした。私も彼女が新規就農して頑張っていることを知りました。

向かい合った顔は、真剣な表情の中に、ちょっと暗さと強い意志が感じられて、農業の道に入ったばかりの頃、あの頃、挫折しかけた自分の胸の内を垣間見たような感じでした。

道内に限らず日本中で新しい農業の担い手を必要とし、それに向けての政策や支援が始まっています。

知識がある訳ではないけど、女性の立場からこの問題に関わって欲しいという依頼を受けて、何度か〝新規就農に関わる支援対策〟関係の集まりに顔を出す機会がありました。

関わると共に、荒れた農地や離農していく農家の問題だけに限らず、輸入食品の不安や食料の自給、農作物の正当な評価や価格、労働力の高齢化、後継者問題等など関連する社会問題も私の関心事になってきました。

また、農村の持っている癒しや創造のはたらきが人間にどれ程の影響力を持っている

小栗美恵（おぐり　みえ）さん

高知県生まれ。

22歳で大阪万博で知り合った酪農家のご主人の故郷北海道に嫁ぐ。

平成2年にイチゴ狩り農園・ゆでトウモロコシ販売を始めた。

平成8年6月に地元の商材を使ったアイスクリームの店「花茶」をオープン（㈲ファーム花茶は平成14年に登録）。

ホクレン夢大賞など数多くの農業賞を受賞。

役職は北海道指導農業士、ケータリング美利香代表、女性農業者倶楽部（マンマのネットワーク）副会長など。

趣味は草木染め、機織りなど。

かなど考えるようになりました。

我が家の回りでもこの十年の内に大半の農家が離農してしまいました。

畑の草がどうのこうのや、出面さんの引っ張り合い、また、作物の出来の良し悪しや気候の話など、顔を合わすたびに〝農業、農作物〟の話題で過ごしてきた仲間が、身を切るような思いでこの仕事から離れていくのを何度もシンドイ思いをして眺めてきました。

言葉では表わせない、何とも寂しい虚しい感情になったものです。

先祖から受け継いできた農地、家屋、農業機械などや、営農する為に長年積み重ねてきた勘やチエ、技術、手腕は、新規に就農した人にポイと受け渡されるモノでなく、その人たちが新たに挑戦することは、かなりのリスクを背負うことです。加えて、自然や風土を相手にするのですから。

それでも、農業に夢を託して入ろうとする人達が多いことを知りました。

「北海道で農業をしたい」と言って、本州から来た若い夫婦、「こんな処で土を相手に第二の人生を送りたい」と言って来た定年就農を目指すご夫婦。

ショッパイ海を渡ってきて、農業者になろうとした一匹狼の女性とも知り合いました。

でも、私の識った彼らは、みんな挫折感を背負って〝農業〟に見切りをつけてしまいました。

農業の敷居が高い？農地は容易くは手に入りません。新規に始めようとする人たちは、そうそう立地条件の良い農地が手に入らないし、経済面なども含めて高いハードルがあるようです。

農業に興味があって来たけど、農地が高すぎる、農業者に成るまでの過程が困難だから諦めたという声も聞きました。

農業技術を学ぶ場、受け入れ農家を探すのにも困難があるようです。また、地域に馴染めない、受け入れられなかったという声もありました。

この数年、新規就農を果たしたご家族に会うことも多くあります。

小さな経営規模ながら有機栽培や低農薬野菜の栽培に励み、徐々に名前を売り存在感のある農家に育っているご家族も識っています。

どんなにか、ご苦労されて今の位置に立たれていることだろうと敬意を込めて思います。

新規就農を目指す人達を受け入れた農家側にも受け入れることの困難さがありました。

農業と一括りにいっても、その中には酪農あり、畑作あり、稲作あり、またそれらを細かく分けてみると肉牛なのか搾乳なのか…、選択肢が多く、新規就農を目指す人が何を選択しているのか、選択しきれないまま飛び込んでくることが多いようです。

漠然とした希望だけで入ってこられても困ります。

また、農業者は技術者であり、労働者であり、経営者でありオールマイティさを要求されるのです。女性には、さらに母親、主婦の役割も付加されます。

どういう農業をしたいのか、作物を作る技術を身につける以上に農業への意識や知識、目指す目標や資金問題などについてしっかりとした考えを固めることが大切だと感じます。

私たち既存の農業者は、農地を進んで貸してあげたり、農機具なども貸してあげられるような関係、地域で受け入れる体制を築き、支援や応援を厭わない気持で対応したいものです。

農業は「いのち」のみなもとなのに、その担い手は、もうどこにもいなくなりつつあります。

自給率二〇〇％といわれる北海道に担い手がいなくなるということは、大きな社会問題です。

新しい担い手を受け入れ、育成していく仕組みを、地域が本腰で取り組むのに、今、早すぎるということはなく、いや、むしろ遅いとも思われます。

頭をあげて、明るく会話のできるような新規就農女性とたくさん出会えるような北海道農業になればこんな嬉しいことはありませんよね。